

- ② 従来の総合政策研究科に対応する「総合政策コース」と国際関係・国際機構に特化し国際機関との連携も視野に入れた「国際開発戦略コース」の2つの研究領域を設定する。
- ③ 3つの研究領域に対応させたカリキュラム編成の雛形を作成した。
- ④ 前期課程修了後に職場復帰することを念頭においている社会人学生に対応するために、課題研究を中心とした「プロフェッショナル・コース」を設ける。また、博士課程進学者のためにマスター・セミナーを中心とした「アカデミック・コース」を設ける。
- ⑤ 学部との共通科目を設定し学部で既修得の科目は大学院での履修を求めないこととする。他方、社会人学生等、学部で未履修の学生に対しては、基礎科目として別途科目を設定する。
- ⑥ インターンシップの単位化をはじめとして、国連ボランティア計画（UNV）との協定に基づいて開発途上国におけるデジタル・デバインドやアクセシビリティを改善することを目的とした「国連情報技術サービス」（UNITeS）における活動等の単位化を2004年度から実現する。

（点検・評価の結果）

目標に掲げた諸点に関する方策については、2006年度に実現すべくすでに具体的な作業に着手している。また、UNITeSの単位化を2004年度より実施した。かなり大幅なカリキュラム改訂となるため、今後その効果を慎重に見極めていく必要がある。

（改善の具体的方策）

現状においては、改善すべきと考えられる点についてはすべて改善に向けた具体的な検討に着手しており、当面はその作業を継続することになる。

8.2.3.2 教育・研究指導のあり方

【評価項目 6-2-3】 社会人学生、外国人留学生等への教育上の配慮

（必須要素）社会人、外国人留学生に対する教育課程編成、教育研究指導への配慮

【評価項目 6-2-4】 研究指導等（学生の研究活動への支援を含む）

（必須要素）教育課程の展開並びに学位論文の作成等を通じた教育・研究指導の適切性

（必須要素）学生に対する履修指導の適切性

（必須要素）指導教員による個別的な研究指導の充実度

（選択要素）複数指導制を採っている場合における教育研究指導責任の明確化

（選択要素）教員間、学生間及びその双方の間の学問的刺激を誘発させるための措置の適切性

（選択要素）研究分野や指導教員にかかる学生からの変更希望への対処方策

（選択要素）才能豊かな人材を発掘し、その才能に適した研究機関等に送り込むなどを可能ならしめるような研究指導体制の整備状況

（選択要素）学生に対し、研究プロジェクトへの参加を促すための配慮の適切性

（選択要素）学生に対し、各種論文集及びその他の公的刊行物への執筆を促すための方途の適切性

<2003 年度に設定した目標>

指導教員制度を中心として、リサーチセンターなどを含めた総合的な方策により、学生個々に対するきめ細かい教育研究指導を強化・継続する。

1. 総合的・実践的な教育・研究指導を行うためのリサーチセンターの設置。
2. リサーチ・フェア等の研究成果の発表機会・媒体の利用促進。

(現状の説明)

講義・課題研究は、昼夜開講制および土曜日開講、西宮上ヶ原キャンパス・大阪梅田キャンパスでの開講等、社会人学生でも十分履修可能なように配慮するとともに、すべての講義・課題研究を学期ごとに開講場所、時間をローテーションすることでより履修をしやすい体制をとっている。

こうした体制のほか、「8.2.3.1 カリキュラム編成」で示した本研究科の基幹科目群を補強し、学生の能力やニーズに合わせた細かな指導を行うために、(1) 「マスター・セミナー」(前期課程1年次秋から2年次秋学期にかけての3セメスター各2単位必修、ただし修了単位には含まない) および「ディサテーション・セミナー」(後期課程1年次秋学期から3年次秋学期まで6セメスター、必修、ただし修了単位には含まない)、(2) 英語プレゼンテーションを中心とした「インターナショナル・プロフェッショナル・コミュニケーション」(以下IPCと略す)の2科目を設けている。マスター・セミナー(前期課程)とディサテーション・セミナー(後期課程)では、学生個々に対して指導教員制度を設けており、履修指導も含め密度の高い個別論文指導(留学生に対する日本語文献講読や日本語による研究論文執筆に関する指導も含む)を行うことで、より完成度の高い論文の作成を目指している。また「IPC」では、課題研究や個別の研究成果を国内外に広く発信するための国際的なプレゼンテーション能力の養成を重視した教育プログラムを提供している(英語ネイティブの専任教員が担当)。他方、社会人学生や中国等アジア諸国からの留学生など、英語から離れていた、あるいは英語を十分に学習していない学生への対応として従来型の外国語文献の講読も行っており(日本人専任教員担当)、学生の語学レベルに合わせたきめの細かい指導体制をとっている。

また、本研究科の特徴である総合的・実践的な研究を行うために、すでに三田市中心部に学外研究施設である「ほんまちラボ」を設置しているが、これに加えて2004年度に「ユニバーサルデザイン教育研究センター」を設置した。また2005年度には、「国際開発戦略リサーチセンター」、「地域・まち・環境総合研究センター」を設置することが決定されている。大学院学生をこれらの研究センターにおいてリサーチ・アシスタントとして採用することにより、実践的な教育・研究指導体制を構築している。

これらの指導体制に加え、パソコンなどの情報機器を備えた大学院学生専用の研究室(24時間利用可能)を複数用意することで大学院学生の研究環境を良質なものとして確保するとともに、総合政策学部リサーチ・フェア(12月開催)、リサーチ・コンソーシアム総会(5月開催)、ディスカッション・ペーパー(随時発行)、大学院研究紀要『KGPS Review』(3月刊行)等、大学院学生による研究成果の発表機会を豊富に用意している。

これらの機会・媒体に発表するに当たっては、その都度、指導教員による綿密な個別指導が行われている。

その他にも、ティーチング・アシスタントとして採用することによる学生への経済的支援、論文発表の際の英文アブストラクトのネイティブ・チェックに要する費用のセミナー費からの支出、大学院学生用図書費（総額200万円）等、学生の研究活動を支援し研究に専念させる環境を整備している。また、学生への連絡体制として、電子メールはもちろんのこと、西宮キャンパスと神戸三田キャンパスのいずれでも連絡が受け取れるよう学生個別のメールボックスを配置する等、社会人学生の便宜を図っている。

（点検・評価の結果）

目標1は、2005年度までに3つの研究センターを設置する予定であり、ほぼ達成されている。

目標2は、大学院研究紀要である『KGPS Review』が計画通り刊行されていることから、ほぼ達成されている。ただし、大学院生の投稿数が必ずしも多くなく、大学院生に対する指導教員を通じた働きかけがより一層必要である。

（改善の具体的方策）

目標はほぼ達成されているが、論文発表の機会を積極的に活用させるよう指導教員による個別指導をより徹底する必要がある。今後とも上記に記した指導体制を強化・継続するとともに、大学院カリキュラム検討委員会、大学院研究室委員会、リサーチ・フェア実行委員会、リサーチ・コンソーシアム実行委員会、大学院研究紀要編集委員会等において、教育・研究指導体制のあり方についてトータルな検討を継続する。

8.2.3.3 教育方法のあり方

【評価項目 6-3-1】 授業形態と授業方法の関係

（必須要素）授業形態と授業方法の適切性、妥当性とその教育指導上の有効性

（必須要素）マルチメディアを活用した教育の導入状況とその運用の適切性

（必須要素）「遠隔授業」による授業科目を単位認定している大学・学部等における、そうした制度措置の運用の適切性

<2003年度に設定した目標>

1. 課題研究の履修学生数の平均化（課題研究のテーマ数、履修登録の方法の検討等）
2. フィールドワークに必要な機器類の充実
3. インターンシップやUNITeS等の単位化
4. 学生の要望を入れた情報機器、ソフトウェアの充実

（現状の説明）

授業形態は主として講義・演習・実習および個別指導によって行われている。「共通科目」